国際生活機能分類（ICF）普及および実用化を目的とした教育研修法の日米共同研究

国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科 教授 学科長

高橋　　泰

【スライド-1】

私は今回、「国際生活機能分類（ICF）普及および実用化を目的とした教育研修法の日米共同研究」の発表をさせていただきます。

発表の前に一言お礼を申し上げます。私はこのファイザーヘルスリサーチ振興財団の研究助成は大変有り難かったと思っております。

世の中に役に立つ研究は 2 種類に分かれて、科研などを堂々と取れる研究と、役に立つけれどもなかなか科研など取れない研究があるのではないかと思うのです。今回の研究は、今からお話ししますようにホームページの開発及び改善という内容であり、普通科研の方ではなかなかお金を貰えない研究である。どうしようかなと思っていたところ、このファイザーヘルスリサーチ振興財団の研究助成が合うということで応募いたしまして、今回この発表の場を与えられたということであります。私自身、今回の発表者の中で最もファイザーヘルスリサーチ振興財団の恩恵を被ったのではないかと自負しております。大変感謝したいと思っております。

【スライド-2】

今回の研究は 4 つのことを行いました。

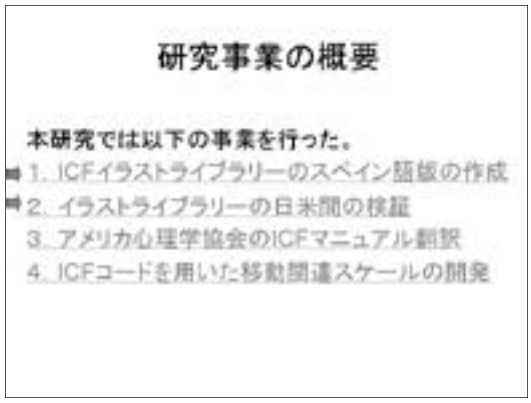
今から説明いたします ICF イラストレーションライブラリーの英語版と日本語版を既に開発していたのですけれど、スペイン語版を作りました。

2 つ目として、前回作ったイラストレーションライブラリーのイラストが世の評価に耐えられるものかどうかということと、イラストを改善しなくてはいけないということのデータ集めです。

3 つ目は、アメリカの心理学協会の ICF マニュアルを翻訳したということ。

スライド-1

スライド-2



4つ目に、以前から持っていたデータを一部使いまして、移動スケールを開発したということです。

時間の関係で、今回は、今回のメインでありましたところのスペイン語版の作成とイラストの検証の2つに絞って発表させていただきたいと思います。

【スライド-3-1, 2】

まず、ICFです。名前は皆さん聞かれたことがあると思いますけれども、ICFについてお話をさせていただきます。

ICDの、人間が生きていくために必要な機能とか環境の要素を整理した体系があります。スライドは英語版の章立てなのですけれど、BODY FUNCTION、BODY STRUCTURES、ACTIVITIES AND PARTICIPATION、それからENVIRONMENTAL FACTORSという4つの章があります。

【スライド-3-3】

それをまた、ICDのように細かい分類がありまして、たとえば、ACTIVITIES AND PARTICIPATIONのMOBILITYの中がこれくらい細かく分かれているというものです。

【スライド-3-4】

例えばDの410。「基本的な姿勢の変換」というのがありまして、ある姿勢になること、ある姿勢をやめること、ある位置から他の位置への移動・・・例えば、椅子から立ち上がってベットに横になること、ひざまずいたり、しゃがむことやその姿勢をやめること、と、これだけしか書いていない。これを日本のケアマネージャーにICFを普及させようとか、色々やったのですけれれども、私は見た瞬間「こんなもの誰が使うのだ」と

スライド-3-1

スライド-3-2

スライド-3-3

スライド-3-4

スライド-3-5

スライド-4-1

思いました。ただ、これはうまく使えば役に立つと思いまして、2003年経済産業省のデータビジュアライゼーション事業の研究資金をいただきまして、それでイラストレーションライブラリーというものを開発いたしました。

【スライド-3-5】

これはツリー構造になっております。

こういうツリー構造の情報はインターネットのブラウザ環境に非常に馴染むということで、インターネットの上でも見れるようにして、しかも絵をつけるとかなり分かりやすくなるだろうということであります。

【スライド-4-1】

これは、今回の資金でバージョンを上げさせてもらった画面なのですけれど、icfillustration.com と入れていただくと、このページにたどり着くことになります。

【スライド-4-2】

ここに日本語、英語、スペイン語とありますけれども、日本語というのをクリックしていただくと日本語の画面に入りまして、

【スライド-4-3】

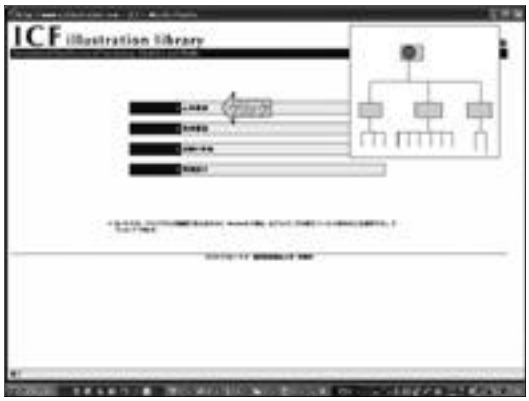
ICF illustration library というのをクリックしますと中に入っていき、

スライド-4-2

スライド-4-3

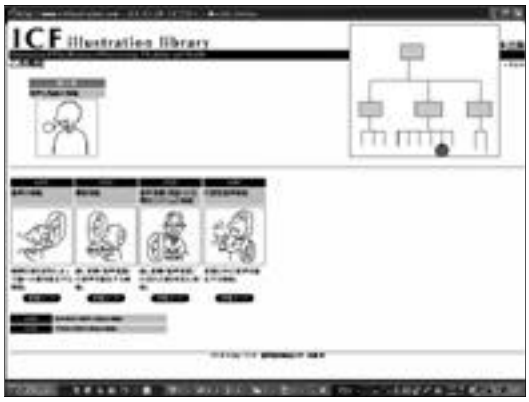
スライド-4-4

スライド-4-5



スライド-4-6

スライド-4-7



スライド-5-1

【スライド-4-4】

先ほど説明した心身機能、身体機能、活動と参加、環境因子というツリー構造の一番上になります。

【スライド-4-5】

この心身機能をクリックすると、

【スライド-4-6】

下の階層の方に入っていくということになります。それで、今度このような下の階層のイラストが出てきます。このイラストは独自のもので、コピーライトは私になっておりますけれども、コマーシャルも含めて完全解放という形で、結構使われています。それで、これをクリックしますと、

【スライド-4-7】

下の階層に入っていきまして、さらに詳しい内容が出てくる。ここの内容はオーソライズされた日本語のものでありますけれども、この絵は私が前回イラストレーター及び一部の協力者と相談しながら作ったものであります。

【スライド-5-1】

これはどういう形で作成したかといいますと、まず英語版から実は作ったので

すけれども、エクセルシートの上に必要な番号であるとかイラストの格納位置であるとか、定義であるとかというものを作りまして、プログラム開発して、これを読み込んで自動的に HTML に変更するという形でプログラムを作りました。

スライド-5-2

【スライド-5-2】

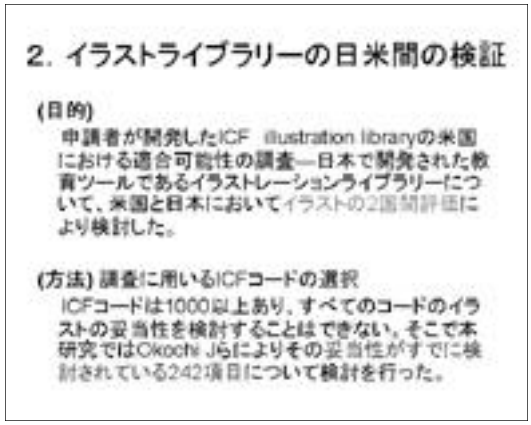
そういたしますと、ここの上に上書きをすると、完全自動ではないのですけれど、比較的簡単に日本語版ができるということで、経済産業省のお金を使って前のバージョンを作りました。

スライド-6

【スライド-6】

今回メキシコ保健省から欲しいというリクエストがあって、やっている間にファイザーヘルスリサーチ振興財団から資金をいただいたので、とりあえずスペイン語版を作ることにしました。英語版と日本語はこういうふうに言葉が入るのですけれども、絵が同じで、スペイン語でイラストレーションライブラリーを作って、メキシコの保健省に提供いたしました。

スライド-7



【スライド-7】

2 番目ですが、我々がこれを開発したときに、私は高齢者のイラスト・機能障害のイラストを今まで 1,000 点くらい作っておりまして、一応プロだという自負はあり、そう間違ったものは作らないという自信はあったので、とりあえず我々の感覚だけで作りました。

前々から、この絵が本当に世界的に通用するか、少なくとも日本以外で通用するかということを評価したいと思い続けておりまして、それで今回ファイザーヘルスリサーチ振興財団の資金を使って、我々が載せている ICF 関係のイラスト 242 点の検証を行いました。

ICF コードは 1,000 以上あるのですけれど、そこの中から 242 の項目の検討を行ったわけです。

【スライド-8】

スライド-8

やり方としましては、アメリカの場合はここは全部英語になるのですが、ICF の定義を書き、それに対応するイラストを付け、適切であるか、部分的修正か、全面的修正が必要かというのを、評価者として OT（作業療法士）、PT（理学療法士）、ST（言語療法士）という職種の方を中心にお願いしました。駄目だという場合はその理由を述べよということで、欄を作って、242 点、日本とアメリカで評価を行ったということです。

具体的に○を付けて、「一目で脳と分かるように描く」、「脳が働いて覚醒しているイラストに」というような指示をいただいて、これが妥当だと思うときに、このイラストをどう作り直そうかと考えて、新しいイラストを作っていきました。

【スライド-9】

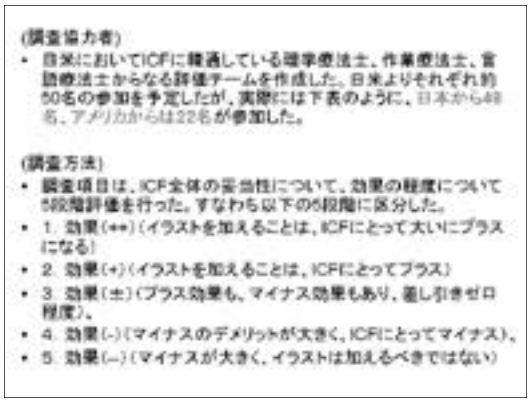
日本から 48 名、アメリカから 22 名の理学療法士、作業療法士、言語療法士が参加してもらいまして、全体評価としては、イラストを加えることによって ICF にとって大いなるプラス（＋＋）、それから、イラストを加えることは ICF にとってプラス（＋）、良いところも悪いところもあるというプラスマイナスゼロ（±）、マイナスの方が大きい（－）、もう絶対にやめるべきだ（－－）というような 5 段階評価をしていただきましたところ、

【スライド-10】

日本は＋＋が 10、＋が 27、±が 9 で、1 名の方だけやめた方がいいよという意見をいただきました。アメリカの方は＋＋が 5 名、＋が 3 名、±が 3 で、－、－－は 1 人もいなかったということであります。

すなわち、58 名中 45 名から加えた方がいいという評価をいただきました。つまりプロの方達も、こういうイラストが付いたものがあった方がいいという評価だったわけです。

スライド-9



スライド-10

但し、非常に多くのイラストに対するコメントをいただき、整理するのが非常に大変でした。

【スライド-11】

評価は 2 種類に分かれるのですが、文化的違いと、それからどちらかというと趣味的と言いますか、その人の思いとかというようなものの違いです。

文化的なことでいいますと、アメリカで適切でないという評価の中では、座るというのは我々は正座のようなものですけれども、そういうことはやらなくて、ポジションがこっちに変わるというような形に変えた方がいいという意見が 4 件ぐらいあり、今回採用したのですが、これはやはり文化の差かなと思います。それから、入浴で座って背中を洗っている絵は絶対に嫌だというのがアメリカの方から数点ありまして、やはりシャワーかなということで、シャワーの絵に変えました。

後は、どちらかというと文化的な差を感じるコメントは少なかったように思います。

スライド-11

【スライド-12-1，2，3】

今回 108 点をどう変えたかというのはなかなか面白い話で、全部紹介したいところなのですが、多かったのが、例えば、スライド-12-1 の一番最初のものは脳の機能を表しているのですけれども、左側のイラストは評判が悪くて、脳を右側のように変えたり、「もっと起きている感じにしろ」というので、起きている感じに変えました。こういうコメントを全部打ち込んで並べて、「これ採用。では、

スライド-12-1

スライド-12-2

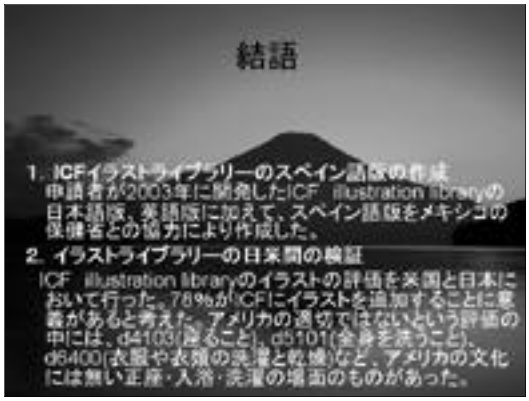
スライド-12-3

イラストをどう変えようか」という形で、研究というよりもどちらかというと盆栽の手間をかけながら整えていくという感じで、かなり楽しみながら修正をしました。

イラストレーターと相談して、左側のオリジナルのイラストを今回右側のように変えて用意しているという形になっております。

【スライド-13】

スライド-13



結語になりますけれども、ICF イラストライブラリーのスペイン語版作成をした。申請者が 2003 年に開発した ICF illustration library の日本語版、英語版に加えてスペイン語版を、メキシコの保健省との協力により作成。

それからイラストの日米間の検証を行った。78 %が ICF のイラストを追加することに意義があると考えた。アメリカで適切ではないという評価の中には、座ること、全身を洗うこと、衣服や衣類の洗濯・乾燥など、アメリカの文化には無い正座・入浴・洗濯の場面のものがあった、ということで、やはりこういう形で意見をいただくと、違う視点でものが見えてくるなと思いました。

次の我々の目標は、ファイザーヘルスリサーチ振興財団のように、こういう研究にも資金を出してくれる所からファンドを取りまして、イラストの更なるバージョンアップのライブラリーを作ることを目指しております。

今回このような研究を行える場を与えていただきましたファイザーヘルスリサーチ振興財団に感謝の意を表して、私の発表を終えさせていただきたいと思います。

質疑応答

会場：　質問ではないのですが、私は今個人的に厚労省の科研で ICF を用いた高齢者の評価を全国の多施設共同研究でやっているのですが、その際に、先生のイラストを 300 項目くらい用いさせていただいておりまして、大変好評で役に立っております。この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。

高橋：　有り難うございます。そういうコメントをいただくのが最高に嬉しい話であります。色々なところで使われ始めておりますので、本当に私もこれをやって良かったなと思いますし、先生のようなコメントをいただけることを大変光栄に思います。

会場：　素晴らしいご発表を有り難うございました。

入浴のところは非常に印象的で、日米の違いということを先生もおっしゃっていたのですが、ADL の評価をアメリカでは FIM を使ってやっていますが、あの評価項目の中には背中を洗うというのが入っていないのですね。どういうことなのでしょうか、これ。というのが先生への質問なのですけれども。

高橋：　アメリカ人に「お前はお風呂に入っている時にこういうふうに動かすことをやるか」ということは聞いた事がないですけれども、シャワーで流している光景はあっても、背中を洗っている光景は映画とかテレビで見たことがないので、やらないのではないのですかね。（笑）

会場：　背中を洗えなくてもいいのですよね。（笑）

高橋：　日本のテレビではよく出てくるけれども、アメリカでは出てこないというところをみると、気にしないのではないかな。これも文化の差ではないかなと思いますけれども、非常に興味がありますので、機会があれば聞いてみて、そういうようなこともコラム的に入れられたら楽しいなという気がいたします。

座長：　他に会場からご質問・コメントはございませんか。高橋先生、何かお一言、まだ付け加えたいことはございますか。

高橋：　本当に最初に申し上げたのがほとんど全てで、こういうのは自前でやるにはちょっと金額が大き過ぎるけれども、研究資金を取るのが難しいものです。最近、教育のインターネットのツールの開発とかというのは大学関係者で考えている人が多く、今回のようなことを考えている人は多いと思うので、もう少しチャレンジできる場があったら多くの人がやるのではないかなと思うし、非常にコストパフォーマンスが高いと思いますので、こういうものが普及していったらいいなと、切に思います。

座長：　高橋先生からご指摘いただいたように、ファイザーヘルスリサーチ振興財団でも、できるだけいわゆるアカデミズムといったことにとらわれずに、社会に必要なことでありながら、なかなか科研費などの対象にならない、そういったものにも特に光をあてていこうではないかということで、選考委員の皆さんと議論しておりますので、どうぞこれからもこういった分野を続けていただきたいと思います。